

(2) 園内研究

ア 平成27年度 資料22

(ア) 研究主題

発達過程を踏まえた造形教育の在り方 ～様々な表現を楽しむための教師の関わり～

(イ) 成果と課題

a 成果

- 幼児が「やってみたい」「楽しそう」と思わず表現したくなるような魅力的な環境構成や素材選び、出し方、タイミング等が大切である。また、教師の言葉掛けから表現を楽しんだり、取り巻く環境や活動に興味をもったりするきっかけになることが多々ある。そのため、教師が幼児の心に響くような、そして、イメージが沸くような言葉を選ぶことで、幼児が自然と表現を楽しむ姿につなげることができた。
- 幼児が楽しんで表現するためには、教師が幼児の実態や興味・関心、発達段階に合わせた活動を工夫したり、道具や素材などを選んだりすることが重要である。また、活動一つ一つを切り離して考えるのではなく、年間を通した長期的な計画として、継続的に活動や経験を重ねていけるようにすることが大切であることが分かった。
- 4歳児は、様々な素材に触れながら工夫してつくる方法や表現技法などをたくさん経験し、表現に必要な技術を蓄積することが大切である。その際教師が、幼児と共に楽しみながら活動し、幼児の思いや出来あがった嬉しさや喜びを受け止め、満足感が感じられるようにすることで、幼児は、のびのびと表現する姿へと変容していった。
- 5歳児は、自分なりにイメージし、工夫して楽しむ姿が見られたり、友達と相談しながら表現を楽しんだり、4歳で蓄積した技能や経験を使いながら徐々に表出することができるようになる。その時教師は、今まで経験してきた素材を幼児が自由に使い表現できるようにする環境だけでなく、年齢に合った新しい素材や道具を出し、より豊かに表現できるような環境を考えることが大切であることが分かった。
- 自分なりにイメージする幼児の姿を認め、幼児の要求に応えるように環境を再構成する中で、幼児に戸惑いが見られた時は、イメージを聞きながらイメージの実現に向けて提案することが重要である。
- 教師は、友達の表現や様子に気付かせたり、出来たものを友達と見せ合い、互いに刺激を受ける場や機会を設けたりする援助を通して、幼児が心を動かし、より豊かで新たな表現につなぐことができることが分かった。

b 課題

- 幼児の表現を十分に受け止めようと意識し関わりをもっているものの、教師や一般のイメージに近づけてしまいそうな言葉掛けをしてしまいそうになることもある。固定概念に捕らわれず、また、作品としての出来ではなく幼児が何を表現したいのか、表現の中に詰まっている幼児の思いに寄り添いながら援助や言葉掛けをしていけるようにしたい。
- 日々、幼児が生活や遊びの中で心を動かされるような感動体験や気付きをたくさんできるように、教師が豊かな感性をもって、幼児と共に様々な出来事や事象との出会いを大切にし、喜び、驚き、関わるのが重要であり、課題である。それは、これらの体験の積み重ねが、幼児の中のイメージを蓄積させ、豊かにし、幼児が様々な表現を楽しむための第一歩となるからである。

(ア) 研究主題

異年齢とかかわりを深めるための指導計画の工夫

(イ) 成果と課題

a 成果

- 年間を通して、年長児と年少児のペアリングをし、異年齢交流や遊ぶ機会を重ねた。ペアは、固定ではなく、様々なペアで組むことができるように配慮したことにより、2学期後半には、学年を越えて名前を覚え、呼び合ったり、やりとりや一緒に遊んだりする姿が多く見られるようになった。
- 年長児の中には、年下の子との関わりに関心をもたない幼児もいた。しかし、ペアリングをして、交流する機会を設けたことで、接し方を知り、異年齢で関わる楽しさを味わうことができた。
- 異年齢交流をできる範囲で多くもったことが功を奏し、交流する時のみならず、日々の生活や遊びの中で、学年問わず、関わりをもつ姿が多く見られるようになった。年少児との関わりを通して、年長児は、自分から相手のためにできることを考え、行動する姿に変容したり、年少児から頼りにされ、役立つ嬉しさや認められる等の場を経験したことから自己有用感が高まり、自信や自己肯定感につながったりした。一方、年少児は、年長児の遊びに興味をもって進んで仲間に加わり、「年長さんってすごいな」「優しいな」「年長になったらやってみたい」等と年長児への親しみの気持ちや憧れ、尊敬の念をもち、進級の期待や意欲がより高まった。
- これまでは、クラスや同学年での遊びの充実のために、園庭で遊ぶ時間が重ならないようにすることも多かった。しかし、教師間で連携をとり、日々の生活の中で異年齢の関わりができるように意識したり、活動や時間の確保をしたりすることで、教師が新しい遊びを知らせなくても自然と遊びの伝承がなされたり、遊びの幅が広がったりした。さらに、双方にとって様々な人と関わる力や楽しさ、言葉で伝え合う力を育むことができたのはよかった。

b 課題

- 異年齢で一緒に活動する機会を増やすことばかりに目を向け、計画や教師の思いだけが先行してしまうと、年長児は「年下の子をお世話する」ことが負担になったり、年少児は、自分を出せずに楽しめなかったりすることがあった。幼児の実態や育ちを捉えながら、互いにとって今は何が大切なのかを考えながら今後も意識して異年齢の交流を進めることが課題である。
- 2学期後半以降は、いろいろな行事や活動が多くあり、異年齢交流の機会が減ってしまった。そのため、十分に関わって遊んだり、継続して一緒に遊んだりすることができなかった。年度当初に年間を見通した計画を立てて実践を進めることが必要である。
- 継続的に交流を計画し、実践することで、異年齢の関わりが深まっていくきっかけになることが分かった。そして、その時の活動内容を工夫することは大切だが、今後はさらに、自然と異年齢の幼児が集まり、自分達で遊びを進めるための場や環境の構成、教師の関わり方や役割を追究していくことで、互いのより良い成長につながっていくだろう。

(ア) 研究主題

幼児の興味・関心を広げ、充実した生活や遊びの実現を目指して
～「生活」や「食育」を中心とした計画的な継続視聴を通して～

(イ) 成果と課題

a 成果

- 年間を通して毎日のように絵本や紙芝居の読み聞かせをしている。その中で、どの時期にどのような絵本や紙芝居を選び、読み聞かせることが幼児にとって効果的であるかを改めて考えることができた。
- 4歳児の読み聞かせで何かを伝えたい時には、話が簡潔で、繰り返し同じ言葉が出てきたり、短い文章で一緒に考えたりするものの方が心に響きやすく幼児の印象に残ると感じた。
- 5歳児では、「食育」の視聴覚教材を継続的に取り入れたことにより、幼児の食への興味・関心が高まり、弁当や栽培活動時に、自ら栄養素の話や食に関する会話をする幼児が多く見られた。
- 季節や行事等、その時期ならではの視聴覚教材を取り入れることにより、教師と幼児で、または友達同士で話をしたり、考えたりするきっかけづくりとなった。
- 日々の生活や遊びの中で、幼児がふとした瞬間に、絵本や紙芝居の内容のことを思い出し、お話の世界と実体験をリンクさせている姿を見ることがあった。それだけ、視聴覚教材は幼児に影響を与えていることがよく分かった。
- 幼児の興味・関心を広げる際には、環境構成や教師の援助や言葉掛けの重要性が言われるが、研究を通して、視聴覚教材という視点からも働きかけることができるということが幼児の姿から分かった。
- お話の内容によっては、1度ならず、繰り返し手に取り読み聞かせをしたり、シリーズ化しているものは、継続して読み聞かせをしたりすることで、幼児がよりお話の面白さを感じることができるので、大切にしていきたい。

b 課題

- 教師が「こんな会話が生まれるといいな」「興味をもって欲しいな」等と幼児の育ちをねらい、読み聞かせをした絵本でも、実際に読み聞かせてみると、教師の思いと違う感じ取り方をしてしまうことがある。幼児の実態や気持ち、興味・関心を細かく見取り、捉えながらふさわしい教材を選ぶことが大切である。
- 「計画的な継続視聴」が想像以上に難しい。教師自身も様々な視聴覚教材を自ら読んだり、新しい視聴覚教材を積極的に取り入れたりと、意識を高くもち、追究する姿勢が課題である。教師が豊富な引き出しをもつことで、計画的に取り入れることはもちろんだが、いざという時に幼児にすぐに提供でき、幼児の心を少しでも多く震わせることができるのではないだろうか。
- 絵本や紙芝居は、日常生活に取り入れやすい視聴覚教材であるが、ペープサートやパネルシアター、エプロンシアター、指人形、ビデオ、DVD等、幼児にとって魅力的な視聴覚教材は他にもたくさんある。これらを、定期的に取り入れることにより、さらに幼児が楽しんでお話の世界に入り、生活や遊びが豊かになっていくのではないか。
- 今年度は、クラスの実態に合ったものを取り入れたが、2年間を見通した計画的な視聴について考えていくことで、さらに幼児の興味・関心が広がる姿や視聴覚教材から

の刺激を受けた幼児の姿や会話等が聞こえてくるのが期待できる。

エ 平成30年度 資料25

(ア) 研究主題

健康な心と体を育てる環境や活動の工夫

～心と体を働かせながら、充実感や見通しをもって生活や遊びに取り組む幼児の育成を目指して～

(イ) 成果と課題

a 成果

- 平成30年度から施行された新幼稚園教育要領と旧幼稚園教育要領を比較すると、「健康」の領域のねらいに「見通しをもって行動する」という文言が新たに加えられている。幼児期の「見通しをもって行動する」とは、どういう幼児の姿なのかを共通理解を図ることを通して、教育要領の内容の理解が深まった。
- 園生活において、基本的な生活習慣を確立することはもちろんだが、幼児が自分でやってみようとする意欲を育て、主体的に活動に関わる中で、今までの経験を基にさらに工夫し、見通しをもって自分たちの生活や遊びをつくりだしていくことが大切であると考えた。そこで、各年齢の発達や実態を踏まえ長期的な視野で、健康の領域で何を育てることが大切なのかをねらいを立て、日々の保育の環境や活動、指導の在り方を考えることができた。
- 幼児は、魅力的に構成された場、自分のことをありのままに受け止めてくれる教師、共感や刺激し合う友達の存在があって、初めて心や体が動かされる。十分な時間の確保の下、思い切り遊び、繰り返し楽しみ、少しずつ遊びが工夫されていく環境の再構成や季節に合った活動の工夫などをしていくことが、幼児の園生活の充実感や満足感につながり、自分たちで生活や遊びを進める姿へと変容することが分かった。
- 幼児が様々な場面で見通しをもって行動するようになるために、4歳児では、集団での生活の仕方が分かり、その必要性を学ぶことが大切である。その際、教師が丁寧に関わることで、幼児は生活に必要なことを一つ一つ獲得し、できるようになると、少しずつ自分から進んでやるような自立心が芽生え、友達の影響も受けながら生活や遊びを進めようとする姿が見られた。
- 5歳児では、生活や遊びに期待感を膨らませるような活動の工夫や教師の言葉掛けで、意欲が高まり、4歳児の経験を基盤に主体的に活動するようになる。活動の中で、幼児は試行錯誤し、経験を獲得し、徐々に友達と協力しながら生活や遊びを進めていく姿へと変容した。時には上手くいかないこともあったり、遊びが停滞したりして葛藤することもあるが、どうしたらいいか自分たちで解決の糸口を見つける経験を繰り返すことで、創造力が培われ、見通しをもって行動ができるようになった。

b 課題

- 教師自身が「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置き、日々の保育と2年間の幼児教育を滑らかにつなげていくことが、幼児が成長するためにとっても重要なことである。教師自身が日々の幼児の実態と成長、課題等を細かく見取り、次の活動や育ちにつなげる指導力と見通す力を磨き続けることが課題である。
- 今年度は、「健康」の領域に焦点を当て、改訂のポイントを押さえ年間指導計画を作成し、評価・反省をしながら研究を深めた。幼児は、遊びや生活の中で総合的に学ん

でいるため、幼児期にふさわしい教育活動を展開するには、「健康」以外にも「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の領域についても考えていく必要がある。

オ 令和元年度 資料26

(ア) 研究主題

幼児が充実感を味わうための戸外遊びの環境や活動の工夫

(イ) 成果と課題

a 成果

- 戸外にある固定遊具は、常にその場に留まり、移動させたり、固定遊具自体の形を大きく変えたりすることは難しい。しかし、固定遊具に教師が手作りのものを環境としてつけ加えたり、移動することが容易な遊具や道具をつなげたりすることで、幼児にとってとても魅力的な場となり、遊びが盛り上がる姿が見られた。さらに、教師が言わずとも幼児自ら環境に関わりながら遊ぶ姿が見られるようになるためには、幼児の実態や興味、心身の発達を促すための適切な環境の工夫をすることが大切であることが分かった。
- 固定遊具や移動できる遊具や道具を使った環境構成は、常に新しく大胆なものでもなく、幼児が繰り返し挑戦したり、遊んだりできるようなものがよい。幼児がこれらの環境に関わりながら継続して充実感を味わうためには、幼児の欲求に合わせて少しずつ変化させることや小さな工夫が大切である。4歳児は、その環境を見て「おもしろそう」「できるから先生、見てて！」と思えるような環境構成、5歳児は、「少し難しそうだけど、やってみたい」と思えるような環境構成がポイントであることが分かった。
- 戸外での環境構成では、前日からの遊びが継続してできるように、あらかじめ場を作っておくことが大切である。
- 5歳児になって、受け身の遊び方から「もっとこうしたい」「こういうのはどう？」と、アイデアが生まれ、友達同士で遊びの場をつくる姿へ変容するようになるためには、4歳児での経験が大切である。4歳児は、いろいろな遊具や道具に触れて遊ぶことが初めての経験であるため、道具ひとつでもいろいろな遊び方があるということ、教師が遊び方や使い方を知らせたり、やってみせたりすることが大切である。
- 幼児期の鬼ごっこやドッジボールなどは、いきなりルールブック通りに始めると、理解面でも身体能力的にも上手く追いつかず、遊びがつまらないものになってしまう。大切なのは、幼児の発達に合わせながら初めはみんなができるよう簡単なルールにし、幼児にとって分かりやすいように色や道具を使って環境を整えたり、伝えたりすることである。また、さらに別のルールのある遊びがおもしろいと思えるように少しずつルールを増やしたり、複雑な身体の動きができるようにしたりしていくことも必要である。

b 課題

- 固定遊具等は、体を動かして遊ぶための遊具や道具だけではなく、使い方や見立て方によりごっこ遊びの場としても変化する。そのことを踏まえて、魅力ある場づくりの工夫を考えていく。
- 実際に子供が遊んでいる時や必要な時に、瞬時に教師が「こういうのはどうだろうか」「やってみたらおもしろいのではないか」等と、提案したり、魅力ある場を作ったり

できるようになるためには、環境の構成のアイデアや工夫を常に研究・追究していくことが課題である。

- 日本には、四季がある。季節の移り変わりの中で、五感を使って様々な体験をできるようにし、自然も大切な戸外遊びの環境であることを意識して活動の工夫を図ってきたい。

カ 令和2年度 資料27

(ア) 研究主題

協同性を育む保育の在り方

(イ) 成果と課題

a 成果

- 幼児が協同して遊ぶようになるためには、まずは「おもしろそう!」「やってみたい」という自らやってみようとする主体性を育てることが重要である。そのためには、幼児が心を動かされるような環境や活動の工夫、友達との関係をつなぐことが教師として大切な役割であることが分かった。
- 4歳児が、友達と協同して遊ぶようになる第1歩は、友達のしていることに興味や関心をもつことである。そのために、教師は、幼児一人一人が教師との信頼関係を基盤に、安心して自分のやりたい遊びを十分にできるように、環境構成するとともに、教師を媒介として友達関係を広げていくように関わる大切であることが分かった。また、葛藤体験や友達と一緒に遊ぶ楽しさや嬉しさを繰り返し経験することを通して、徐々に友達と楽しく遊ぶにはどうしたらよいか分かるようになる。
- 5歳児になると、友達とのやりとりの中で、自分の思いを伝えたり、相手の話を聞いたりしながら、遊びを進めていく姿が見られるようになる。その時教師は、互いの思いや考えを共有できるようにしながら目的に向かって実現できるように手を差し伸べ、達成感や満足感、充実感を味わうことができるように関わる大切である。
- 日常生活や遊びの中で、友達との関わりを深めていくためには、幼児一人一人の発達に合わせた教師の的確な関わりが重要になる。例えば、幼児が葛藤している場面では、すぐに解決に導くのではなく見守ったり、励ましたりする。また、幼児が友達にどのように接していいか戸惑う場面では、幼児の思いを汲み取って言葉を補い、相手に自分の言葉で伝えられるようにそっと背中を押してあげるなどである。
- 一人一人が自己を発揮し、協同して遊ぶ姿になるためには、得意なことや個々のもつ長所などを教師がアンテナを張り、幼児を褒めたり、友達に気付かせたりし、互いに認め合う雰囲気づくりをするとよい。
- 各年齢の発達を理解するとともに、その時期に必要な経験ができるように、教師は見通しをもって遊びや活動を計画することが大切であることが分かった。また、幼児一人一人及びクラス全体として協同性の芽生えに焦点をあて、細かく見取り、実態に合わせて適切に援助したり、保育活動を展開したりすることも必要である。

b 課題

- 幼児の興味・関心と欲求に応じた内容とで、教師が「協同性」を育むための意図的な環境構成や保育展開をバランスよく行うことが難しい。教師の思いが強すぎてしまうと、遊びの方向性がずれてしまい、停滞したり、幼児の主体性が損なわれたりすることがあった。常に教師は、幼児が心から活動や友達との関わり楽しんでいるか、関わ

りはどうだったか評価し、反省・改善をしていくことが課題である。

- 友達とのコミュニケーションを苦手とする幼児や発達障害のある幼児などが、友達とのやりとりをする際に必要な手段や感覚を徐々に見つけられるようにすることに加え、周囲の幼児が幼児期から多様性を受け入れながら、人間関係を上手く築くことができるようにするための教師の関わり方や「協同性」を育む保育の在り方について考えていきたい。

キ 令和3年度 資料28

(ア) 研究主題

生活や遊びの中で数量、図形、文字などへの興味・関心、感覚を育むためには

(イ) 成果と課題

a 成果

- 数量や図形、文字などに、日常の生活や遊びの中で幼児が触れる機会がどのくらいあるか改めて着目してみると、想像以上に多くあることに気付いた。そして、教師が意図的な環境づくりや関わりをすることで、より幼児が数量や図形、文字などへの興味・関心、感覚を育むことができるということが分かった。
- 幼児の実態に即して簡単なことから始め、段階を追って、次の経験につながられるように環境や活動を工夫することが大切である。幼児が「わかった」「できた」と感じることで、さらに興味・関心が高まる姿が見られた。
- 例年、語彙を増やしたり、文字に興味をもったりするきっかけづくりとして、「しりとり」や「言葉集め」等を取り入れてきたが、初めて視覚教材（文字を書いたマグネット）を使い、言葉遊びをした。耳で聞くだけの言葉遊びをした時よりも、視覚教材があることで、幼児がよりイメージを広げながら楽しむ姿や、様々な言葉や文字を知ったり触れたりする機会にもなり、とても効果的であることがよく分かった。また、遊び方の工夫次第で、いろいろな言葉遊びにつながられるよい教材だと感じた。
- 数量では、数を数えるだけでなく、例えば「多い・少ない」「大きい・小さい」「重い・軽い」「長い・短い」など大きさや重さ、長さ等の様々な概念に触れる経験になるよう意識して幼児に関わるようにした。そのことにより、数量に対する感覚が磨かれ、自分なりに知識を活用している様子も見られるようになった。その経験は、具体的体験として小学校算数の基礎となり、学習の理解につながると考える。
- 形を捉えることが苦手な幼児に対して、三角や四角等を組み合わせると、動物や乗り物に変身する簡単な図形パズルをしたり、マグネットを自由に組み合わせてイメージしたものを作ったりする遊びから始めた。幼児にとって親しみやすく簡単な教材を用意し、形を組み合わせると新たな形が出来上がる面白さを感じられるようにしていくことが大切だと分かった。そして、形が見えるようになってくると、イメージに広がりが見られ、描きたい絵を描けるようになっていたり、折り紙製作でできることが増えたりし、表現の仕方や出来上がる作品、製作時の意欲や取り組み方の姿にも変化が見られた。

b 課題

- 在園児が一人のため、幼児の実態に即した活動の工夫ができた。しかし、今回の指導方法や環境、活動の工夫を集団の中で行った場合は、個人差があり、必ずしも幼児一人一人が文字や数量、図形などへの興味・関心を高め、感覚が育まれた姿につながる

とは限らない。大人数の場合は、友達からの刺激が活動に広がりを生むという良い点を考慮し、集団活動の利点を生かした環境づくりや活動の工夫をすることを大切にしながら、研究を深めていくことが必要である。

- 今年度の研究は、5歳児のみである。4歳児が文字や数量、図形などに興味・関心をもつためにはどんな環境や活動の工夫が必要なのか考えたり、5歳児の前段階として4歳児にどんな経験をし、つなげていくのかを考えたりすることで、より充実した研究になるだろう。さらに、就学を見据え、小学校1、2年生の学習内容について教師が理解を深め、小学校教育へのつながりや見通しをもち、活動を設定していくことも課題である。